友人関係への干渉者と友人の謝罪が関係性高揚の変動に及ぼす影響

—友人ネットワークの境界密度の調整効果—

○長谷川 孝治

(信州大学人文学部)

キーワード: 関係性高揚の変動、干渉者、友人ネットワークの境界密度

The influence of nuisance and apology from friend on fluctuation of relational enhancement: Boundary density of network as moderator.

Koji HASEGAWA

(Faculty of Arts, Shinshu University)

Key words: fluctuation of relational enhancement, nuisance to friendships, boundary density of friend network

目 的 本研究の第 1 の目的は、関係性高揚の変動プロセスを明らかにすることである。関係性高揚とは、自らの親友関係を、他の一般的な親友関係よりも良いものと捉える傾向のことである(遠藤, 1997)。日本ではこのような対人関係を介する間接的な方法によって、自己高揚を図る傾向が強く、そのことが精神的な健康につながるとされる(黒田ら, 2004)。では、このような関係性高揚現象は安定したものか、あるいは変動するものか。長谷川(2010)は、この問題について検討し、親友関係における関係性高揚が親友関係を壊す可能性のある干渉者の出現によって弱まることを明らかにした。では、一度弱まった関係性高揚は、再び回復するのだろうか。

本研究は、この問題について、親友がとる関係配慮行動に焦点を当てて検討する。具体的には、先行研究で検討された「親友との会話に割り込んできた干渉者出現状況」の後、「親友が孤立した状態にある回答者に謝罪する状況」を提示し、関係性高揚のレベルが変化するかを検討する。高田ら(2009)は、対人葛藤を引き起こした親密な他者から謝罪を受けた場合、より寛容的になることを明らかにしている。この知見から考えると、一旦弱まった関係性高揚も、親友が謝罪し、干渉者との関係を説明することで、再び回復すると考えられる。

仮説 1 干渉者の出現によって関係性高揚は低減するだろう。

仮説 2 親友の謝罪によって、関係性高揚は回復するだろう。

本研究の第 2 の目的は、関係性高揚の変動をサポートネットワークの境界密度が調整するかを検討することである。先行研究では、ストレスフルな状況ではサポートネットワークの境界密度が低いほど、個人の適応にポジティブな影響を及ぼすとされる(浦, 1992)。これらの知見から、本研究の検討対象である関係性高揚の変動について考えると、次のような予測が成り立つ。すなわち、親友が含まれる大学内の友人以外に、学外の友人をより多く持っていれば、親友関係を壊す可能性がある干渉者が出現しても、関係性高揚が減少しにくいと考えられる。

仮説 3 友人ネットワークのうち、親友を含む大学内の友人の割合が低い人は、高い人と比べて、関係性高揚の減少が小さいだろう。

方 法 **調査対象者** 大学生 296 名(男性 162 名、女性 130 名、不明 4 名)。平均年齢 18.6 (SD=1.32) 歳。**調査の概要** 想定法による質問紙実験の形式をとった。まず、大学内にいる最も親しい同性の友人を一人思い浮かべ、イニシャルを記入させた。その後、以下の内容のシナリオ 1 と 2 を質問紙に挿入し、各シナリオを読む前と後の関係性高揚の変動を検討した。**シナリオ 1**: 親友 A さんと仲良く話をしているところに見知らぬ他者 X さんが現れ A さんに親しげに話しかける。その後、X さんの出現によって話題についていけず、自分一人おいてけぼり状態になってしまった。**シナリオ 2**: おいてけぼり状態になり、呆然と立ちつくしている自分に、親友 A さんが気づき、謝罪する。さらに、A さんは、干渉者 X さん

との関係を詳しく説明した。シナリオ 1 の前に「関係性高揚 Time 1 (T1)」、シナリオ 1 の後に「関係性高揚 Time 2 (T2)」、シナリオ 2 の後に「関係性高揚 Time 3 (T3)」、「サポートネットワーク」の尺度(後述)に回答を求めた。**分析に用いた尺度** 1) 関係性高揚: 自分の親友関係は、他の親友関係と比べてどのようなものかを測る、遠藤(1997)の尺度を使用(11 項目、5 件法)。2) サポートネットワーク: 自分に何か困ったことがあったときに、さまざまな助けとなってくれる友人(同性・異性どちらでも可)を思い浮かべ、イニシャルを記述。さらに、その中で、大学内の友人には○印を記入。

結果と考察

関係性高揚尺

度の各項目と

中央値との差

を比較した結

果、Time 2 の

1 項目を除き、

有意差が見ら

れた(表 1)。

このことは、

干渉者の出現

前後、親友に

よる謝罪後のい

ずれの時点でも

「自分達の親友関係は他の親

友関係よりも良い関係である」という関係性高揚現象が見ら

れたことを示唆する。また、関係性高揚尺度について、T2 から T1 の得点を引いた変化量、T3 から T2 の得点を引いた変化量得点をそれぞれ算出した。前者は干渉者の出現前後の関係性高揚の変動を、後者は干渉者の出現後から親友の謝罪後にかけての関係性高揚の変動を意味する。前者の平均値は負で、後者の平均値は正であり、各平均値を 0 と比較した結果、いずれも有意な差が見られた。このことは、干渉者の出現後に関係性高揚が減少し(仮説 1 支持)、親友の謝罪後に関係性高揚が回復した(仮説 2 支持)ことを示す。

さらに、仮説 3 の検討のために、全友人数を共変量とし、関係性高揚全体 (T1・T2・T3) × 全友人人数に占める大学内の友人の割合(低・高)の共分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であり、下位検定の結果、大学内の友人の割合が低い人は、高い人に比べて、T2 時点の関係性高揚が高かった(仮説 3 支持)。この結果は、親友とのサポートネットワークの境界密度が低いほど、干渉者の出現による関係性高揚の減少が小さいことを示す。本研究の結果、関係性高揚現象が干渉者の出現やその後の親友の謝罪によって、変動することが明らかにされた。また、このような関係性高揚の変動過程を調整する変数として、友人ネットワークの境界密度が機能することが示唆された。

※本研究は、榊原有梨氏(平成 21 年度信州大学人文学部卒業生)の卒業論文のデータを再分析したものである。

表 1 関係性高揚尺度の平均値と中央値との差の t 検定

	T1	T2	T3	T2-T1	T3-T2
ポジティブな側面					
親密である	3.94 ***	3.37 ***	3.94 ***	-0.57 ***	0.57 ***
気が合う	3.91 ***	3.53 ***	3.83 ***	-0.37 ***	0.29 ***
必要な存在である	4.03 ***	3.58 ***	3.92 ***	-0.45 ***	0.34 ***
良い感じである	4.21 ***	3.30 ***	3.92 ***	-0.91 ***	0.62 ***
支援的である	3.68 ***	2.99 ***	3.61 ***	-0.69 ***	0.63 ***
安心できる	4.10 ***	3.20 **	3.91 ***	-0.90 ***	0.71 ***
楽しい	4.27 ***	3.19 **	4.00 ***	-1.08 ***	0.81 ***
ネガティブな側面					
退屈な関係である	4.29 ***	3.71 ***	4.17 ***	-0.58 ***	0.46 ***
不誠実である	4.31 ***	3.79 ***	4.31 ***	-0.52 ***	0.52 ***
不満を感じる	4.00 ***	3.26 **	4.11 ***	-0.74 ***	0.85 ***
情性的である	3.70 ***	3.54 ***	3.83 ***	-0.16 **	0.29 ***
全体	4.04 ***	3.41 ***	3.96 ***	-0.63 ***	0.55 ***

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

T1(Time 1), T2(Time 2), T3(Time 3)は中央値と、変化量は 0 と平均値の比較

ネガティブな側面は、得点を逆転させた